

発声テキストの導入と効果

— アンケート調査を通して —

内田恵美子¹・大川晶也²

(1：東海学院短期大学部、2：南山国際高等学校中学校)

要 約

音楽における中等・高等教員養成課程及び保育者養成課程の発声法指導の目標は、学生自身の歌唱能力の向上と、経験や研究から導き出した独自の発声法の構築、それによる赴任校における学生への指導から更なる研究に繋げる事の出来る教員の人材育成であると考えている。これらを論じた「保育者・教員養成課程における発声指導の必要性」にて作成した発声テキストを保育者養成課程の学生と高等学校学生向けに新たに作成、使用した講義を行い発声技術習得の有無をアンケートを通して調査、考察によってテキスト改訂の必要性に繋げていく。

キーワード：発声テキスト アンケート 声楽 教員養成課程 保育者養成課程

1. はじめに

中学校の教職課程教育では中学校学習指導要領(2017)¹の目標、A表現に「歌唱の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。」と記載され、さらに「ア 歌唱表現に関わる知識や技能を得たり生かしたりしながら、歌唱表現の創意工夫すること」と冒頭に記載されている事から、音楽の授業では、各学校の音楽の授業はもちろんの事、学校行事や合唱祭などの通しての「歌唱、発声指導」が教員養成課程において最も重要であると考えている。また、保育者養成課程においても幼稚園教育要領(2008)²「表現」解説には「教師などの大人が、歌を歌ったり楽器の演奏を楽しんだりしている姿に触れることは、幼児が音楽に親しむようになる上で、重要な経験である。このように、幼児期において、音楽に関わる活動を十分に経験することが将来の音楽を楽しむ生活につながっていくのである。」と記載されており、細田淳子 蟹江春香(2009)³は、「保育者は子どもたちに子どもの歌を伝え一緒に歌う。そのときに、子どもにどのような声で歌わせたいのかいうはっきりとしたイメージを持ち、声の出し方にまで気をくばる必要がある」と論じている事から、保育園や幼稚園では毎日のおこなわれている音楽活動において、保育者は幼児達の前で率先して明瞭な声で語りかけ、大きな声で歌い、さらには幼児達のお手本になるような歌唱技術がある事が望まれると考える。

この事から保育者及び教員養成課程における発声法指導の手本となるような歌唱技術の習得、毎日の教職、保育活動で喉の負担が軽減するような発声法の指導の必要性を論じた「保育者、教員養成課程における発声指導

の必要性」を通して、独自の発声テキストを作成、指導法を提示した。

今回はその発声法テキストを保育者養成課程の学生と高等学校学生向けに新たに作成し、実際に使用した講義を行い、その前と後をそれぞれ調査対象者が記載したワークシート(以下アンケート)の集計を行い、その結果から発声技術習得効果の有無、およびテキスト内容改訂の必要性の考察し、発声法指導の研究に繋げていく。

2. 調査概要

調査対象と研究方法は以下の通りである。

2-1 調査の目的

保育士養成課程の学生と高等学校学生向けに作成した発声テキストを使用した発声法指導における習得効果の調査とテキスト改訂の考察。

2-2 調査対象と調査方法

今回の調査対象者(以下受講生)は、G県短期大学部幼児教育学科の学生17名(以下、短期大学学生)、A県高等学校の学生13名(以下、高等学校学生)である。尚これらの受講生はこれまでに声楽のレッスンや発声法の指導を受けた経験はない。

2-3 調査期間

短期大学生(平成30年10月24日) 高等学校学生(平成30年10月25日、29日)

2-4 倫理的配慮

今回の調査では、全ての受講生に対して、調査内容とデータの取り扱いについて、口頭にて説明を行い、アンケート記述内容を論文への使用の理解と協力を確認し承諾を得た。また回答は調査にのみ使用し、個人を特定さ

れることはないことを説明した。

2-5 調査内容

今回の調査は指導実践前にアンケートを配布し、受講生自身が講義前に自分声の特徴や、コンプレックス、好きなところなどを「しゃべる声」「歌う声」の二つに分けて作成した。また同様に、講義にあたり各受講生の声に対する目標を再認識させる為に調査を通して希望する発声の成果を記入させている。

自分の声を考えてみよう

1. 自分の声はどんな声? (好きなところ、気になること、コンプレックスなど)

●しゃべる声…

●歌う声…

2. どんな声を目指したいですか?

●しゃべる声…

●歌う声…

(「自分の声はどんな声?」項目1「どんな声を目指したいですか?」項目2)

音域の確認は各受講生の受講前の声の音域を明確化する為、同じ受講生で2人～4人1組のグループを組み、ピアノ又はキーボードを使用し、音階を互いに弾き合いながら協力し合い、声がどこまで出るか確かめ、アンケートに記入させた。

3. 自分の声の音域はどれくらい? 実際に友達と一緒に確かめてみましょう。
音域を確かめて、楽譜に記入してみましょう。

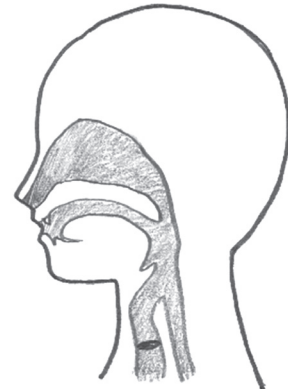


(「自分の声の音域はどれくらい?」項目3)

2-6 声を出すイメージの調査

受講生がこれまでに持っていた発声のイメージや声が鳴るイメージや声が鳴る場所などの感覚を調査する為、指導実践前に声が鳴るイメージを受講生に記入させた。

声をどこに響かせるように声を出すと良いか考えてみましょう。
下の図に声のイメージを自由に書いてみましょう。



(「声をどこに響かせるように声を出すと良いか」項目4)

3. 指導実践

指導実践では(姿勢)(口の開け方)(腹式呼吸)(発声練習)の4つのカテゴリに分け、それぞれテキストを使用し、口頭で補足説明をしながら指導実践した。今回は先の論文、「保育者・教員養成課程における発声指導の必要性」にて作成した発声指導テキストでは専門的な語句や文章が多く、限られた時間の中で学生への発声法習得に支障をきたさないよう、また円滑に理解してもらう為、学生向けに要約した「発声テキスト簡易版」を作成し、講義に使用した。

姿勢「図1」

・ストレッチ(特に上半身を中心に)を動かして固まっている筋肉をほぐす。

☆両肩をほぐす ☆手を頭の上で伸ばす

・真っ直ぐ立つ意識と余計な力を取り除く

☆壁に足のかかとをつけて、真っ直ぐに立つイメージを感じる。

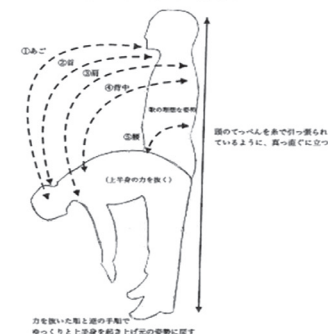
☆壁から一歩前へ出て、頭から首、肩、背中、腰の順に徐々に力を抜いて、前屈の姿勢をとり、力を抜く。

(お尻から下は力を抜かずそのまま)

☆前屈とは逆の腰、背中、肩、首の順番に起き上がり、元の姿勢に戻る。

姿勢 図1

あご、首、肩、背中、腰の順に力を抜き反力の姿勢をとる

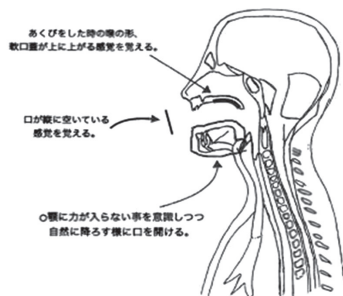


発声テキスト簡易版 姿勢 図1

口の開け方（喉の開口）あくびを参考に「図2」

- ☆両頤の付け根あたりを手で軽くマッサージし、自然に開けられるところまで口をあける
- ☆可能であれば鏡を見ながら、えんぴつを口の中にゆっくと入れて、口蓋垂（喉沈降）が上部に動く事を感じる。（軟口蓋が上がる）
- ☆感覚がわからない場合はあくびをして口の中の開き方を感じ取る。
- ☆上記の感覚を感じながら（ieaou）母音で声を出す

口の開け方（あくびを参考に）図2



発声テキスト簡易版 口の開け方 図2

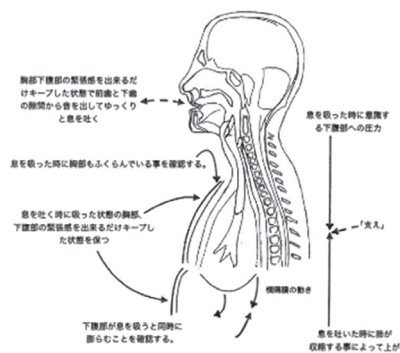
腹式呼吸（呼吸法）「図3」

- ☆前項目の姿勢をキープしながら胸と下腹部（ヘソ）に手を当て、息を吸う時にヘソ周りが同時に膨らむ事を確認する（もしも感じ取れなければ、仰向けで同様のメソッドを実施する。）
- ☆息を吐くのと同時に吸った状態のお腹の状態をキープしながら前歯と下歯の間から「スー」と音を出しながら息を吐く
- ☆息は出来るだけ全て吐き出してから吸うように意識する。

腹式呼吸（声を出してみる）

- ☆上記の腹式呼吸を実践しながら出来るだけ高い声で息を吐く。（“ふうううう”と声を出す）その時に頭のつむじから声が出るイメージを意識する。

腹式呼吸（呼吸法）図3

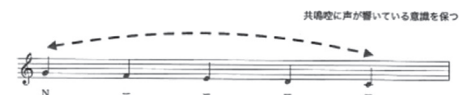


発声テキスト簡易版 腹式呼吸 図3

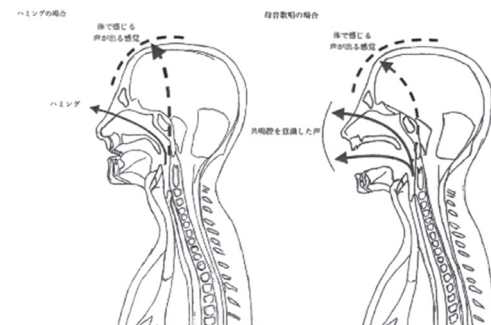
練習（姿勢、呼吸を意識して）「図4」

- ☆口を閉じて声を出す。ハミングで声を出し、共鳴腔に声が響いている意識を保つ。

母音の発声と練習法（ハミング） ※全てのトレーニングを音（調性）を上向きさせていき、低音域から高音域まで実施する



母音の発声と練習法 図4



発声テキスト簡易版 練習 図4

全ての項目の指導実践終了後指導者は受講生にもう一度講義前に行った音域調査を実施させ、音域に変化があったかどうかを確かめさせた。

その後、「姿勢」「口の開け方」「腹式呼吸」「練習」のそれぞれの実践を通して感じた事、講義全体を通して得た発声の変化をアンケートに記入する様促した。

5. 発声練習をして、感じたこと、思ったことなどを書きましょう。

6. 発声練習をして何か変化はありましたか？

「発声練習を通して感じた事、思ったこと」項目5
「発声練習をして何か変化はありましたか？」項目6

4. アンケート結果

それぞれのアンケート記述内容は以下の通りである。

自分の声はどんな声？（項目1）しゃべる声（自分で感じる）	
高等学校学生	短期大学学生
<ul style="list-style-type: none"> ・アニメ声 ・うるさい、高い ・自分が思っているよりも高い所があまり好きではない ・高低差がある声 ・こもる 小さい ・滑舌が悪い（他2）高い声が出ない <u>こもった声</u> ・気分があがると高くなる ・かすれてる ・考えたことない ・低め ・高い 	<ul style="list-style-type: none"> ・低い声（他3）、話すペースが遅い ・鼻声みたい ・呂律がたまにまわらない ・滑舌がよくない（他2）、低め、たまにこもる、早口（他1） ・低い、大きい（他2） ・声が高い、聞こえにくい ・少し低い声、静か ・高い ・高すぎず、低すぎない ・大勢の前で話すと声が高くなる、<u>聞き取り辛い声</u> ・声が通らない ・高さは普通、発音がはっきりしない ・もぞもぞしゃべる、アホっぽい喋り方

3-1 項目1 しゃべる声

自分の声はどんな声？（項目1）歌う声（自分で感じる）	
高等学校学生	短期大学学生
<ul style="list-style-type: none"> ・ビブラートなどテクニックがないので淡々と歌ってる感じがしてしまう ・無理やり感 ・すぐ裏声になる、音域が狭い ・特徴がない ・高い声が出ない、音程がずれる ・高めのこもった感じ ・自分ではわからない ・低め 	<ul style="list-style-type: none"> ・合唱の高い声なら出る ・高い声が出ないので裏声になってしまう ・小さい（他1）、もぞもぞ ・音域が狭い ・高い声がでない（他1） ・高い声は歌う声で低くなると地声になってしまう ・高い声がきれいにでない ・高い（他1） ・混ざって聞こえにくい声 ・緊張感のある声 ・普段しゃべる声と違う ・低い ・棒読みみたい、声出すのが大変そうな声 ・基本高い声で歌う ・高い音が出しにくい ・高い音なのにピッチが低い、はきはきした発音じゃない ・地声で歌ってしまうことが多い

3-2 項目1 歌う声

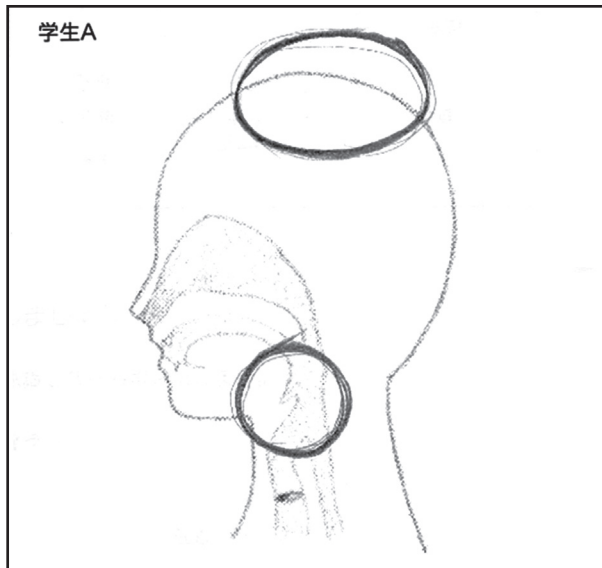
どんな声を目指したいですか？（項目2）しゃべる声（自分で感じる）	
高等学校学生	短期大学学生
<ul style="list-style-type: none"> ・普通の声 ・もっと落ち着いた声 ・はきはき、大きい、しっかり、聞き取りやすい ・聞きやすいアナウンスーみたいな声 ・通る声 ・滑舌とこもった声を直したい ・低め ・ハスキーボイス ・透明感のある声、コロンとした声 ・キレイな高音が出る声 	<ul style="list-style-type: none"> ・滑舌が良い ・はきはきした声 ・通る声（他1）、聞き取りやすい声（他1） ・恥かしい時声が小さくなるから、聞こえる声でしゃべりたい ・聞こえやすい声 ・小さい時があるので、聞こえる程度に大きい声 ・聞きやすい声（他1） ・大きな声でも聞きやすい高さでしゃべる ・はっきり聞きやすい声 ・はきはき、大きな声 ・高くてかわいい声、聞きやすい声 ・はきはきと聞き取りやすい

3-3 項目2 しゃべる声

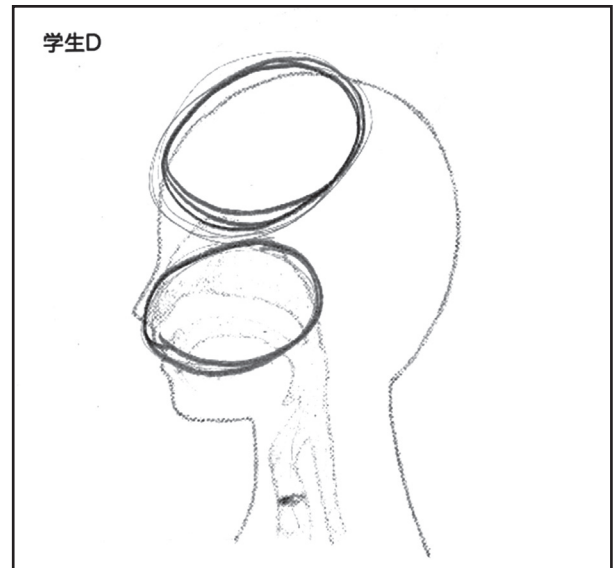
どんな声を目指したいですか？（項目2）歌う声（自分で感じる）	
高等学校学生	短期大学学生
<ul style="list-style-type: none"> ・うまい、高い、きれいな、コレサワさん、ヨルシカさん ・ビブラート、こぶし、かすれた声、叫んでいるような声など、色々なテクニックを使い分けたい！歌える音域を増やして伸びるような声 ・きれいな、すき通る、96猫さんみたいにになりたい ・男の歌も女の歌も上手に歌いたい ・特徴のある声、すき通る声、春茶さんみたいな声 ・音程がずれないようにしたい ・透き通ったようなきれいな歌声 ・きれいな声 ・力強い声、透明感のある声 ・高い音が綺麗に出る事 	<ul style="list-style-type: none"> ・童謡の語りかけるような高い声を出したい ・高い声がだせるようになりたい ・響く声 ・音域を広く、聞き取りやすい発声 ・高い声をだせるようにしたい ・低い声もきれいにだせる ・きれいな声 ・大きな声、高音低音がしっかりとでる ・よく響く高い声 ・曲に合わせて変化できる声 ・声が通って聞きやすい ・キレイな声 ・すき通る声、ビブラートがつく？ ・音域が広くなりたい ・きれいに高音がでる声 ・音程が完璧、ビブラートができる

3-3 項目2 歌う声

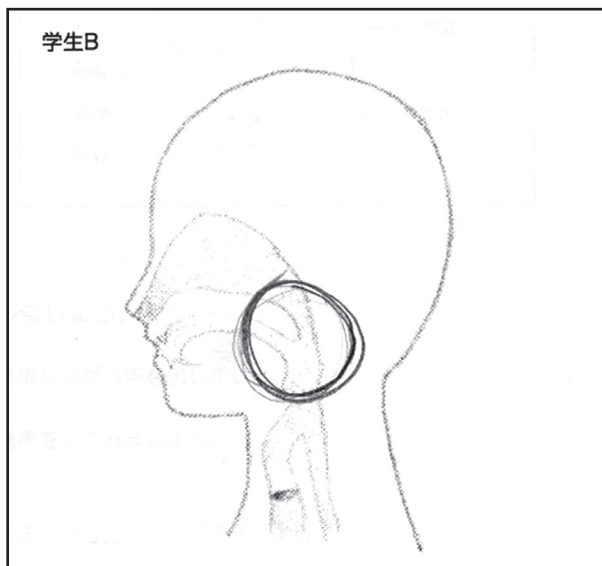
3-4 項目4 声のイメージ



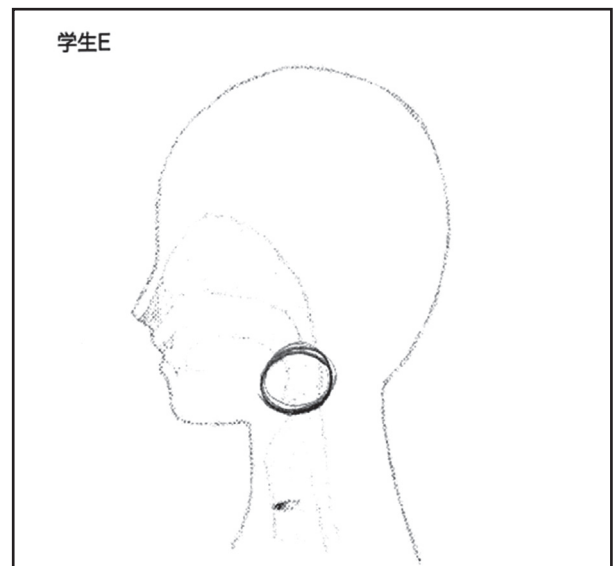
学生A



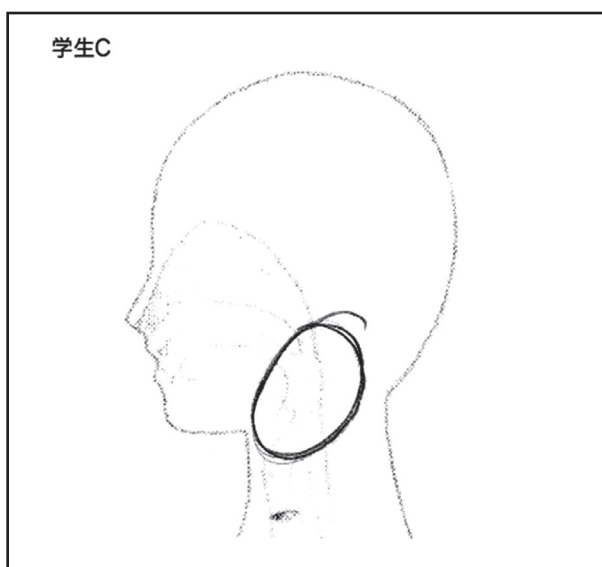
学生D



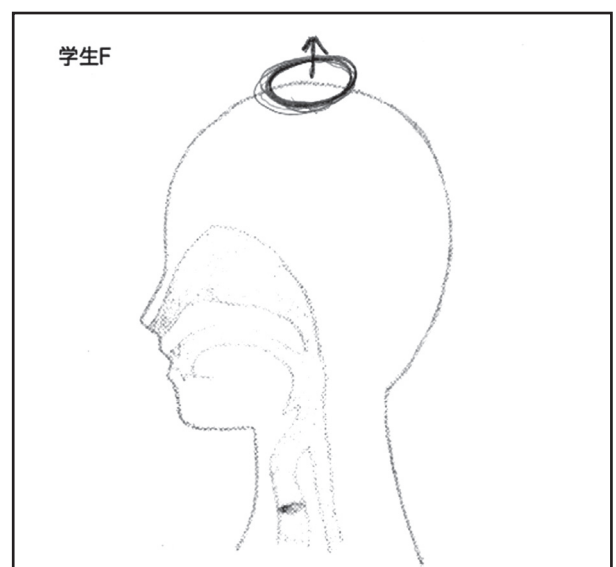
学生B



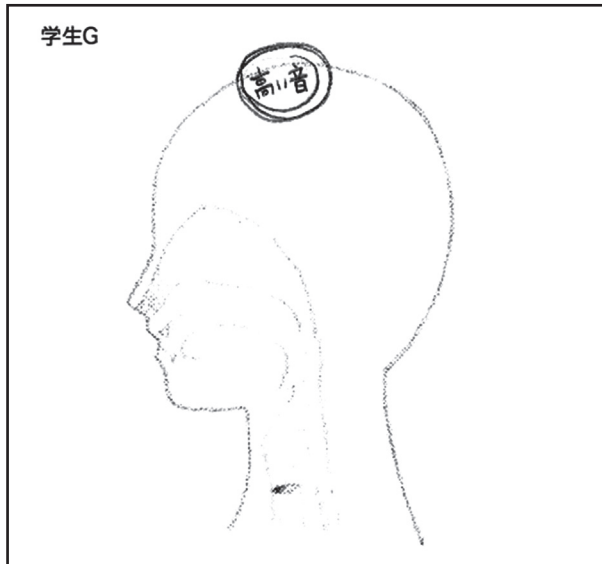
学生E



学生C



学生F



学生G

「発声練習を通して感じた事、思ったこと」(項目5)	
高等学校学生	短期大学学生
<ul style="list-style-type: none"> ・喉がひらく感じがした ・腹筋した後のような疲労感を下腹部に感じた ・喉を大きくあけた ・胸が痛くなった ・声がお腹から出ている感じがした ・声を通った ・苦しかった、全身が疲れた感覚があった ・声が出にくい、高い音がかすれる ・練習する前に確かめた自分の音域が練習した後の方が音域の幅が広がった ・声が出やすくなった ・お腹が痛い、鼻が詰まっている感じがする 	<ul style="list-style-type: none"> ・ハミングをしている時口の中が振動でかゆくなるとおもった、自分が出せる音域を知ることができてよかった、呼吸だけでもちゃんとやると体力を使うとわかった ・少しだけでも発声する前より声が出しやすかったです、高い音を出すのも発声前は下からあてる感じだったけど発声後はしっかり上からあてる感じになっていました ・発声練習することによりやる前より高い音が出しやすくなった気がする、発声練習でやったことを意識して歌を歌っていきたい。 ・以外と声出るんだなと思いました

3-4項目5 発声練習を通して感じた事

「発声練習をして何か変化はありましたか？」(項目6)	
高等学校学生	短期大学学生
<ul style="list-style-type: none"> ・少し低い声のでるようになった気がする ・高い音のでやすくなった気がする、お腹を意識して発声ができるようになった ・お腹から声が出た ・歌う(ハミング)音声が前より大きくなったと思う ・お腹を意識した ・最後の方は最初と比べて高音が出る。 ・音域が上がった、おなかに力が入っている感じ、高い音に芯がある声が出るようになった、高い声が出しやすくなった ・高い音が出せるようになった、疲れた、おなか痛い 	<ul style="list-style-type: none"> ・声が出しやすくなった、口からだけでなく鼻や肺やお腹もつかって声を出すように意識した。 ・声量が出るようになって歌いやすかったです、口の奥まで開けられるようになりました ・発声練習する前は高いドが出しにくかったけど、発声練習をやったことにより少しスムーズに出せた感じがしました、今までよりのどの奥をひらくことにより自分の声が響いている感じがしました ・声が出やすくなった、音の高さが出やすくなった、リラックスしてよけいな力を入れずに歌えた
<ul style="list-style-type: none"> ・音域がふえた、鼻がつまった歌い方になれてきた、楽になった ・音域の変化はなかったが、体の使い方は変わった、のどから声が出ている感じがしない 	<ul style="list-style-type: none"> ・軟口蓋を上げるという意識とお腹に力を入れて歌うという意識がついた、姿勢が良くなった気がする、腹式呼吸を意識してやるようになると思う。 ・どのように口をあげた方がいいか、どこを意識して歌ったらいいのかを考えながら自分なりに意識をしながら歌う事が出来ました ・声がとても出やすくなったしとおりやすかったです、声もキレイに聞こえたし音が響く感じで今まで歌っていたよりもとても良くなりました。

短期大学学生

- ・ 少し高い声が出せるようになった気がした、お腹から声をだすように意識して歌う事ができた
- ・ 音の音域が広がったように感じた、声の出し方を変える事で、声の質（聞こえる声）がきれいに聞こえた、高音を出すとのどを痛める感覚があったけど腹式呼吸を意識して歌う事でのどの痛みをあまり感じなくなった
- ・ 声の感じがやわらかくなった、お腹を意識すると音域が広がった気がした
- ・ はじめより楽に声が出せた気がした、腰で呼吸するように意識した
- ・ 腹式呼吸や軟口蓋を意識することで高い音が少し出しやすくなった
- ・ 高音が出やすくなった、大きな声のでるようになった、姿勢や意識の違いでこんなに変わるものだと驚いた、響く開いた声になった
- ・ 声の出し方も変わったし、声量や声の響きも変わりました、歌う姿勢も変わりました
- ・ 高い音まで出て気持ち良くなったので歌詞にも気持ちが込められるようになった、また姿勢を意識して立って歌う事によって大きい声が出た
- ・ 発声練習前は高い声を出す時にカスカスになったり音がずれてしまっていたけど練習後は安定した高い声が出せるようになった

3－5項目6 発声練習を通しての変化

5. 受講生のアンケート結果の比較と分析

今回は調査結果を分析する際に以下の事項を考慮し分析した。

初めに短期大学学生と高等学校学生とでは一度の授業時間数に相違があり、1回の授業時間が90分の短期大学学生への調査に対し、高等学校学生への調査は50分と短い調査となった。その影響もあり、特に高等学校学生においては全ての調査課程に対する時間が少なくなり、またアンケート記述においては、短期大学学生に比べて年齢における語彙力の差も明らかになり、アンケート記述が全体的に比較的簡素な記入となってしまった。それと併せて高等学校における調査では授業時間の都合上項目4の記述を省いている。尚分析にあたっては各項目の回答データからキーワードとなる単語と関連した文節を抽出し、類似性のある言葉、またはキーワードでまとめたものを使用した。

「自分の声はどんな声」の項目1では自分自身の声に対して否定的な回答がほとんどを占めていた。その中でも特にしゃべる声の項目では「低い」「滑舌が悪い」という記述が多く見受けられた。それに類似した記述として、「呂律がまわらない」「聞き取り辛い声」「発音がはっきりしない」の記述も見受けられた。これと同時に歌う声の項目では短期大学学生、高等学校学生共に「高い声

がでない、音程がずれる」「高い音が出しにくい」という高音域を指すキーワードが多く見受けられた。

高木和男（2008）⁴は学校教育の授業時間数において、「平成14年度から学校教育は、これまでにない学校週5日制の下で行なわれてきている。それに伴って当然のことながら年間の総授業時間数も各教科などの年間授業時間数も削減とならざるを得なくなった。小学校音楽科においても中学年で10時間、高学年で20時間の縮減となった。このように年間70時間を下回る時数の中で授業を行なうこと自体が、今までの音楽科の流れから見た大きな特色である。次にそのこととの連動で、縮減となる授業時間数に対処するために指導内容を今までになく縮小して再構成していることや、その示し方は従前の学年目標と同じように2学年をまとめた形にしていることも、今次の改定での特色となっている。」と論じている。

この事から、授業時間の減少により各学校における音楽教育の授業内容が年間70時間以下の現状では指導案事項が最優先の授業となり、指導案に明記のない高音域発音のトレーニングやしゃべり声を矯正したり、滑舌を矯正する機会に触れる経験が非常に少なかった事が考えられる。また人間が聴く自分自身の声と、他者が聴く声とでは本質的に異なり、自分の声を客観的に聴く事はできない。

「どんな声を目指したいですか？」項目2ではしゃべる声で「聞き取りやすい声」に意見が集中し特に短期大学学生のほとんどが「はきはきした声」や「聞こえやすい声」などほぼ同一の記述が集中した。千葉昌哉、渡会純一（2017）⁵は「教育現場に出ると、まず子どもたちに届けるのは声であり、歌詞である。にもかかわらず、それが聞こえない状況であると、子どもたち、特に言葉が読めない幼児は歌の内容を理解できないまま音程のみを追いかけて歌うことになる」と論じている。また、細田淳子 蟹江春香（2009）⁶は保育者養成教育における発声法にて「保育者は毎日子どもと向き合い、歌を歌ったり話したりして声を使っている。その他絵本の読み聞かせをしたり、紙芝居を読んだり、声を使うことは毎日の仕事の重要な部分となっている」と論じており、この事から幼児教育課程の短期大学学生のほとんどが保育士への就職を志望し、保育活動にいて聞き取りやすい声が保育士において必要だと認識している事が理解できる。これに対し高等学校学生においては各学年の進路や希望する職業が未確定な事から、自身の声に対する目標や理想が進路と結びつけられる回答が殆どなく、「コレサワさんヨルシカさん」「96猫さんみたいになりたい」など個人の好きなアーティストや憧れの歌手に近い声を求め

る回答が多く見受けられた。

「発声練習を通して感じた事、思ったこと」項目3では、ほぼ全ての受講生が教科書を使用した指導実践に対する身体の変化や感覚を感じ取っており、アンケート記述では「腹筋した後の様な疲労感を下腹部に感じた」「腹式呼吸は普段使用していないので少し疲れた感じがした」「腹式呼吸をしてみて難しいと思いました」「姿勢をキープするのが難しかった」などの発声法のトレーニングの経過から生じる疲れや疲労感と、喉の開きの為の軟口蓋や口蓋垂の動きの試行錯誤や、腹式呼吸を会得するための横隔膜の動く意識やコントロールなどのトレーニングの難易度の高さが明らかになった。また他の記述に「お腹に意識しすぎて口の開け方まで考えられなかった。」との記述もある事から、テキストを通した発声技術を習得する課程で、腹式呼吸や軟口蓋の意識、軟口蓋が上がる意識などの身体の内側における発声テクニックについて意識化することは容易ではない事がわかる。

「声のイメージ」項目4については今回記述のあった受講生（短期大学生のみ）をAからFに分け取り上げたが、記述のあった学生のお大半が声の響かせる場所の意識が声帯周辺に集中し、共鳴空や鼻腔への響く意識をもたない事が解った。（学生A B C E）これと同時に一部の学生は頭頂部に響かせるイメージを既に習得している事も確認できる。（学生A D F G）

そして一番興味深かったのは記述した学生AからF以外の受講生は記述が全くなかったことである。これは受講生がこれまでに声楽のレッスンや発声法の指導を受けた経験がない事から、声の響く位置や場所を意識する経験も同時に無かった事が考えられる。

「発声練習をして何か変化はありましたか？」項目5では、ほぼ全ての学生が「高い音が出やすくなった気がした」「音域が上がった」「軟口蓋を上げるという意識とお腹に力を入れて歌うという意識がついた」など調査前に比べて特に音域の拡大を実感した記述が得られた。

6. 比較と考察の結果からみる反省点とテキストの改訂の必要性について

今回2種類の学校における調査から以下のことが反省点として明らかにされた。筆者の経験から保育者養成課程では授業カリキュラムの中で、ピアノ奏法や歌唱授業などが必修科目として設定されている学校がほとんどを占めているが高等学校では音楽を他の芸術科目との選択科目として導入している事から、趣味の一環として捉えている学生が大半を占めており、更に毎年音楽大学や保育者養成課程の学校への進学希望者は4年制の普通大学

に比べて少ない事から、学生個人の発声法の必要性の認識に保育者養成課程の学生と高等学校学生では大きな相違がある事がわかった。

よって今後保育者養成課程の学生と高等学校学生それぞれの授業時間に応じたテキスト内容の改訂を考察していく。これと同時に保育者養成課程の学生にはより専門的に発声法を学習し、高等学校以下中学校向けにカテゴリを減らし、要約した発声法テキストの改訂を考察していく。

引用・参考文献

- ¹ 中学校学習指導要領（2017）文部科学省第2章第5節
- ² 幼稚園教育要領解説（2008）文部科学省2章第2節
- ^{3,6} 細田淳子 蟹江春香（2009）保育者養成教育における発声法 東京家政大学研究紀要第50集 p31
- ⁴ 高木和男（2008）学習指導要領からみた音楽教育の変遷尚絅学院大学紀要第56巻 p258
- ⁵ 千葉昌哉、渡会純一（2017）声楽的見地における学生の弾き歌いに関する提言 東北福祉大学教職研究学術雑誌論文 2016巻 p140

The introduction of Voice Text and Its Effect — Through a Questionnaire Survey — UCHIDA Emiko and OKAWA Shoya